

松ヶ崎中学校との交流会

絵・報告●松田菜瑠美
構成●千田倫子、後藤美奈子



研修生が知らず知らずのうちに果たしている大きな役割、それは佐渡の方々との密な繋がりで、新人スタッフの松田菜瑠美が興味津々、地元の小さな中学校との十年に渡る交流の現場をレポートします。

十月三日（火）、研修生は佐渡の松ヶ崎中学校で交流会をしました。

毎年恒例になっている交流会は今年で十年目になります。全校生徒十三名の中学生と研修生が一日活動を共にする行事です。

朝八時三〇分、「KODO」のロゴが入ったトラックと共に研修生が中学校に着。外で出迎えてくれた中学生と元気に挨拶をするところから始まります。これまでも学校林作業や文化祭などで交流してきたこともあり、生徒さんたちはとてもフレンドリーに迎えてくれました。

はじめの時間は書道でした。「研修生との交流会」といっても太鼓で交流するだけではないのがこの行事の面白いところでしょう。体育館一面にセットされた新聞紙とお習字道具の光景は壮観です。

大きな筆を持ち、それぞれ思い思いの文字を書いていきます。中学生は「意気軒昂」「一球入魂」などなど。それに対して研修生は「童のように打ちたい」「念ずれば花ひらく」「馬鹿万歳」「滅罪宣言」……。そのほかには「クレッシェンド」（なる）、「ハーデンカタ」（くさすけ）とついつい稽古のことを書いてしまうのは研修生の性なのでしょうか。因みに「ハーデンカタ」

は鬼剣舞の口唱歌です。たくさんの作品と共に、体育館が墨汁のいい香りでいっぱいになりました。次は、研修生が中学時代の自分について語る時間です。



中学生の時の自分は何をしていたかというところから、現在に至るまでを話していきます。決して流暢とは言えない、それぞれが口にする自分の想い。中学生は終始、興味津々といった様子で聞いてくれました。中学生にとつて、年の近い研修生の言葉は大人の話よりも響くものを持っているのかもしれない。一人ひとりのこれまでの経緯を聞いていくことで、

一年生も二年生もみんな別々の環境で生まれ育ち、それぞれの想いを抱えてこの研修所にやってきたこと、様々な異なるベクトルがここで交差し、二年間を共に過ごしていくことを改めて感じます。一年生は、現在の自分や将来の自分について悩みや迷いを持ちながら今を模索しているのに対し、二年生は具体的にこれからの自分のあり方を考えているようでした。

「大切なのは夢を見ること」「研修生活で生きていく力がついた」と中学生に向かつて話す彼らがとても力強く見えました。

松ヶ崎中学校（松中）と研修所

研修所が現在の柿野浦に移って二年ほどたった一九九八年頃、近くの集落の知り合いの方からお電話が。「松中の生徒が研修所に行ってみたいと言ってるんだ……」。

その後、休みの日に何人か来てくれて、一緒にご飯を食べ、太鼓叩いて、研修所も元は中学校、電気を消して真っ暗な校舎を肝試ししたりして遊んだのが始まりです。それから生徒さんの希望で年に二回の学校行事になりました。春は研修所開催、秋は中学校開催。何をしても喜びを分かち合おうかと、必ず生徒会企画と研修生企画が盛り込まれ、中学校におじゃまる時は授業にも出席させてもらいます。

最近では学校林作業にも参加させていただくようになり、父兄の方、地域を愛し支える方々、と出会いが広がることも研修生にとつて貴重な体験です。

また、松ヶ崎中学校はスタッフの上之山博文、研修生の大場幸恵の母校で、幸恵は中学生の時にこの交流会を経験しています。



生徒さんの手紙より 三年・計良麻穂美
「鼓童研修生の皆さんへ」

私は今回の交流会が三年間最後となるのでとても楽しみで、思い出を沢山作ろうと思っていました。特に印象に残っているのは、皆さんの演奏です。太鼓に向かって一心になって心が打たれ、また歌では、太鼓とは違う素晴らしい音が、私達も文化祭では人に何かを伝えられるように歌いたいと思います。研修生の演奏を聞き、一つのことへ一生懸命になる素晴らしい音を改めて考えさせられました。そして太鼓の音は私に強い印象を与え、体の奥の奥まで



演奏では木遣りから始まり三宅、千里馬、大太鼓を披露。研修生の発する音に真剣に耳を傾ける子ども達の心には、この音はどのように響いたのでしょうか。お昼の時間には全員一つの輪になって給食をいただきました。一緒に過ごすことに、お互い少し気恥ずかしさを感じつつ、それでも同じ釜の飯を食べるうちに中学生との距離も縮まっていったようです。

午後からの生徒会企画「松中・鼓童合同体育祭」は四種目の競技と応援合戦。

研修生の周りを巻き込む積極的なパワーと、中学生の活気がその場全体に満ち、賑わいとなり、笑いとなる。研修生の元気が中学生に伝染したのか、それとも中学生の元気を分けてもらったのか。与え、与えられて良い雰囲気の中、全員参加の大盛り上がりで終わりました。

松ヶ崎中学校で大変印象に残ったことは、先生が生徒達と常に対等の立場で物事を見ていること。書道、給食、競技、応援合戦と生徒と共に参加したことに驚き、校長先生が躊躇なくリレー競技に参加されていることにさらに驚きました。生徒が企画した競技の中で、校長先生がバトンを持って全速力で走る。今、こんなに先生と生徒の距離が近い学校はどれだけあるでしょう。

研修生と生徒、生徒と先生、お互いの壁を越えて触れ合えたとき、それはとても気持ちの良い空間になります。みんなの元気で壁が吹きとんだような、そんな交流会となりました。

研修生の日々の稽古は、太鼓に留まらず農作業や唄、踊りと様々で、その中で今回の内面について人に話したりする機会があります。早朝に起床することや寒い稽古場での稽古、多岐に渡る活動の数々。それはこの過程を通じてきていない人には未知の世界です。交流会で活動を共にして、研修生活のほんの一部分を垣間見ることができました。最中は、彼らの明るさと積極性にただただ敬服するばかりでしたが、それも日々の積み重ねから成っているものです。

自分の殻を破り、ひたすらに、がむしやりに、直向きに。

自分にはなかなかできないと思う反面、そんなことができるようになってみたいとも思います。手本にしたいことがたくさんあります。彼らと接して「よーし、頑張ろう！」とさわやかな気持ちになりました。

松田菜瑠美(まつだ・なるみ)

一九八四年十二月二日生まれ。山形県南陽市出身。鼓童に来る前は、和太鼓部に所属して洋画を専攻する美大生。この四月より事務所の仕事に従事している。秋にはマネージャーとして交流学校公演にも同行した。初めて尽くしの旅は「大変だけれど楽しかった」。



素朴な東北娘は、絵を描いたり物を作ったりの得意な分野も仕事に携みつつ、鼓童村事務所内を飛び回る毎日です。

しみ込み、体を硬直させました。その音は一生忘れられることはできないと思います。他にも皆さんの研修所に至るまでのお話を聞き、太鼓との出会いは人それぞれだけれども、思えば一緒だから頑張れるのだと感じました。私も同じ夢や希望を持つ仲間を見つけ頑張っていきたいです。そして自分のやりたいことを必ずやり、人から尊敬される人になりたいなと思いました。私は三年間交流会をやってきて、研修生の皆さんから沢山のことを学ぶことができたことに良かったです。そして研修生の皆さんの演奏と実際に叩いたりして、私は鼓童や太鼓が「大好き」になりました。また会える日を楽しみにしています。

